

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（三）

蘭 部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（二三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一（明治書院、二〇〇三年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語については、やや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）：応永二十三年（一四一六）正月一日から三月二十九日まで。『米沢史学』三〇号、二〇一四年。

○現代語訳（二）：応永二十三年四月一日から七月二十九日まで。『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号、二〇一四年

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二十三年八月一日から十二月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、

初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇三～二〇一四年）

村井章介『綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考

―』（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

松蘭齊『『看聞日記』に見える尼と尼寺』（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二七号、二〇一二年）

同「室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―」（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二八号、二〇一三年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

八朔の贈答

（応永二十三年）八月一日、雨が降った。夜には暴雨となり、雷もしきりに鳴った。上皇様への八朔（※）の贈答品は、銅に金メッキした燭台を一对、これには唐松の枝を打ち付けてある。そして銚子・

提と引合紙三十帖である。室町殿へは、竹の枝を打ち付けた燭台一對、桐竹を打ち付けた銚子・提、そして引合紙五十帖である。室町殿はすぐにお返しをなされた。それは練貫三重と太刀一振りだった。宮家の人々や外様（※）の家司たちもいつもの通り御所様へ進物を献上してきた。喪中である今出川家との贈答進物は、皆、遠慮した。酒宴があった。御所様は、新御所様のお部屋にいらつしやった。皆が酔っ払って、最後は無礼講の酒盛りとなった。田向経良三位らがお仕えた。

※八朔（はっさく）…八月一日に贈答しあう慣習。

※外様（とざま）…この場合は、在京している侍臣をいう。

三日、晴。仁和寺御室御所の永助法親王へ八朔の進物を贈られた。唐絵一幅と引合紙二十帖である。相応院浩助法親王から、銚子・提と杉原紙十帖が贈られてきた。すぐにお返しとして、石鉢と引合紙十帖を贈った。園基秀参議が今年になって初めて八朔の進物として脇息と杉原紙十帖を献上してきた。仁科入道も初めて太刀一振りと沈香を載せたお盆一つを献上してきた。冷泉正永・寿藏主・勝阿らも、今日、進物を献上した。

さて聞くとところによると、高倉永行参議入道が今日死去したそうだ。田向長資朝臣が、朝廷の小番を勤めた。合い番は、四条隆信参議だったそうだ。

五日、晴。仁和寺御室御所から八朔のお返しに牛一頭が贈られてきた。竹王丸が牽いてきた。この牛は、そのまま、正親町三条公雅中納言兼大宰権帥へお返しとして送った。

にらめっこ

七日、晴。勾当内侍藤原能子殿から八朔の進物が届いた。こんなに遅れるとは、どうしたことだろうか。新御所様のお部屋で酒宴があった。新御所様が賞品をお出しになって、にらめっこをした。勝った者が賞品を取った。面白かった。

桂地藏信仰の隆盛

九日、晴。今日、京都の桂地藏に物真似やお囃子をするパレードが参ったそうだ。室町殿と斯波義教勘解由小路右衛門督、この両家の中級家臣たちが集まって、田植えの様子を物真似したものだという。それは、金襴緞子（どんす）の衣装を着るなど、人々の目を驚かすものだったらしい。また別の集団による山伏の峯入りする様子を真似したパレードもあったという。それは山伏が背負う笈（おい）などの道具類を高級な中国製のもので仕立ててあり、まれに見る見物だったという。最近、京都とその周辺の人々は、桂地藏への参詣に熱中しているようだ。先年、北山へお囃子をしながら地藏送りしたのと似ている。日がたつにつれて、桂地藏のご利益は著しくなっている。特に病人へのご利益があらたかだそうだ。

十二日、晴。上皇様へお願いする領地相続承認の件で、伏見宮家の領地リストができたので、今日、献上することになった。綾小路信俊前参議を通して、取り次ぎ役の勾当内侍へお送りした。

十四日、雨が降った。石清水八幡宮放生会の警備責任者の役を命じられた田向長資朝臣が今夕から、同宮に詰めるという。田向経良三位と庭田重有朝臣らも同行した。

石清水八幡宮神人の訴訟

十五日、明け方に大風が吹いて、雨が降った。午後四時には晴れた。

聞くところによると、石清水八幡宮放生会に際して、同宮の神人が四十二ヶ条に及ぶ訴訟をし、社殿内に神人四人が閉じ籠もって、神輿の運行を妨げているそう。それで石清水八幡宮社家から幕府に何度も報告をしたのだが、將軍のご裁断が遅れているので、神輿の巡幸は延期となったようだ。放生会行事所の責任者は三条公量大納言、参議の役は中御門宣輔、弁官の役は柳原行光左少弁、警備役は田向長資朝臣である。延期するかどうかはつきりしなかったので、責任者の三条以下は石清水八幡宮に泊まることになったそう。

さて聞くとところによると、花山院忠定大納言は以前から病氣だったが、今日、亡くなったそう。病氣で臥せっている折、近衛大将兼任の辞令が出された。西園寺が兼任していた近衛大将の職を借り出して、任命なさったそう。ただし花山院の死後、近衛大将の職は西園寺に戻されたという。花山院家には子供がいなかった。それで家門を相続する人がいない。家門を相続する養子を上皇様がお探しになっているそう。

桂地蔵へ御所様の代わりに行光が三日間（※）、お参りすることになった。私もついでに願書を行光に託して奉納した。願いがかなったら、私も桂地蔵にお参りするつもりだ。

【頭書】（『日記』の上方の隙間に書き加えた記事）今夜の名月はすばらしい。御所に人がいないので、歌会ができなかった。残念だ。

※本年十月二十二日が、行光が御所様の代官として三ヶ月間桂地蔵に参詣した最終日だという（同日条）。三日間（原文は三ヶ日）は三ヶ月間の誤りか。

十六日、晴。放生会での神人の訴訟に対して、室町幕府の裁断が出て、

判決書が出されたそう。しかし、十六日の今日に放生会の神輿を出した先例はない。翌月に延期した例はある。いずれにせよ翌日に延期した例はいまだかつて全くないという。それで延期となった。

琵琶「杉甲」

さて園参議が「杉甲」という名の琵琶一面を献上してきた。永年大事にしてきた楽器だそう。献上致しますと言ってきた。「杉甲」は他に例のない珍しい楽器である。

桂地蔵へのお囃子パレード

十七日、朝晴れていたが、昼に雨が降った。桂地蔵へ伏見荘の村人たちがお囃子のパレードをしに出かけた。朝早く御所へ挨拶に来た。たいした豪華さではないが、出で立ちはいきりであった。警備役の者が三十人あまり、いろいろな甲冑に金や銀で作った太刀・刀を帯びて、練り歩いた。次に御幣を持った法師、その次に鬼の面をつけた者が棒を振り回している。さらにお囃子の者が三十人あまりいて、いろいろな飾り物をつけた小笠をそれぞれが持っている。また飾り物をつけた大笠一本を持つ者もいる。お囃子の者たちはそれぞれ印金（※）の模様がある金欄綴子などの衣装を着ている。その他にも雑兵が二百人あまりいた。見物人が大勢集まってきた。日暮れ時分になって伏見荘に帰ってきた。また御所へ挨拶に来たので、酒樽を与えた。雨が降ってきたので、急いで戻っていった。

聞くとところによると、室町殿が清和院地蔵堂にお籠もりになったそう。この御堂を建て替えなさり、一部は造築したらしい。

※印金（いんきん）：織物に型紙をあてて金粉・金箔などを置いて描く模様。

十九日、雨が降った。医師の昌耆法眼が来た。十四、五日頃から御所様が腰痛で起き上がることができない。また夏頃より食欲不振であり食べていないので、憔悴が甚だしい。去年の冬の脚氣も再発したと昌耆は言う。夏からはじめて同阿の治療は効果がなかった。最近が高間の処方した良薬を勾当内侍殿が送ってきていたが、それも効き目がなかった。この薬は御所様のご容体に対してふさわしくありませんと昌耆は言う。引き続き治療するよう、御所様はお命じになった。

十四味建中湯

二十一日、晴。昌耆が来た。漢方薬の十四味建中湯と腰に付ける塗り薬などを持ってきたという。高価な薬だと言う。御所様のために特別に調合いたしましたとも言ってる。それで、青銅製の花瓶や扇などを褒美としてお与えになった。

中国人の物真似

二十三日、雨が降った。地蔵(※)へのお囃子パレードは、四条烏丸から京都に入った中国人の物真似であったそうだ。これまでのお囃子パレードのなかで、これほど手の込んだものはなかったという。すぐくすばらしいと専らの評判である。

※「地蔵」：桂地蔵であろう。

秘伝の灸

二十五日、曇。お彼岸の初日である。身を浄めた。今日は南向殿が亡くなつて三十五日目である。南向殿のために御経を読んだ。

大光明寺の継首座(※)が来た。御所様の腰痛治療のために秘伝のお灸をしたらどうかと言ってくれた。医師の心知客(※)から伝

えられた最も秘伝のお灸だという。私は詳しく教わって、別紙に記しておいた。

※首座(しゅそ)：禅宗寺院で修行僧のリーダーをさす役職。

※知客(しか)：禅宗寺院の役職の一つ。来客接待や入門僧の世話役。二十七日、雨が降った。大光明寺長老が来た。御所様の病氣平癒の祈祷として二十四日から三日間(※)、大般若經の略読をしている。

今日がその最終日だという。継首座が来た。御所様の腰に秘伝の灸を据えるように命令があつて、継首座が治療してくれた。ずいぶんと効き目があつたようだ。御所様はご褒美として扇を継首座に与えた。

※「三日間」：四日間の誤りか。

妻・庭田幸子の妊娠

二十八日、雨が降った。私の妻である今参局庭田幸子が妊娠して、着帯の祝いをした。

九月一日、晴。今日は伏見荘の御香宮の祭礼である。今夜の神輿巡幸を見物した。御旅所で相撲があつた。御所の皆にも、ひそかに見物させた。

桂地蔵への参詣

二日、晴。お彼岸の最終日だ。身を浄めた。ところで、御所様の病氣回復と伏見宮家領地に関する訴訟の成功などをお祈りするため、御所の二十四人が桂地蔵へお参りに行った。お参りに出かけたのは、近衛局・田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・寿藏主・周侍者で、伏見荘の地侍たちも駆け集めていった。お地蔵様はきつと願いをお聞き届け下さるであろう。田向経良の妻である芝殿が来た。

伏見宮家領地支配の承認

三日、晴。上皇様より八朔贈答のお返しがあった。銀作りの太刀一振りと白い雁皮紙で包んだ扇十本、そして引合紙十帖であった。冷泉永基朝臣が取り次いで、冷泉正永が持ってきた。火事や引越で上皇御所が慌ただしかったので、お返しが今まで遅れてしまったという。さて室町女院のご遺産である領地を伏見宮家が支配することを確認した上皇様の承認書が、今夜届いた。上皇様の承認書などを勾当内侍が取り次ぎ、綾小路信俊前参議が受け取って持つてくるはずであった。しかし綾小路がいにく病気だという。田向経良三位がちょうど京都に出ているので、受け取るように言付けをした。播磨国の国衙領（※）と別納（※）の十ヶ郷の領地に対する承認書も追って出されることである。

室町女院から継承した領地は永遠に伏見宮家領とする上皇様のお言葉も領地の承認書に書き載せられた。これは、甘露寺兼長前大納言が執筆したという。特に「永遠に」という字句を書き載せられたことは、御所様としては本望であり、ご満足のことである。めでたいうことだ。

この上皇様の承認書の内容については、上皇様から室町殿へ既に連絡済みであるという。それで、この件について室町殿は広橋兼宣へお話しになったそう。広橋卿は、田向三位を通して、室町殿のお言葉を詳しく伝えてきた。それによると、室町殿は伏見宮家の領地の保障をいい加減にはしませんと仰ったそう。伏見宮家領地支配の承認については、広橋を通して室町殿へもお願いをしているところである。田向三位は、その旨を記した室町殿宛ての御所様の書

状を持って、京都に出ているところでもある。

さて桂地蔵へこの領地承認のことを祈願して、昨日二十四人がお参りした。そうしたら早速、本日、上皇様の承認書が届いた。すべて桂地蔵のおかげである。いよいよ深く信仰しなければならぬ。

※国衙領（こくがりよう）：各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているので、荘園と同じような私領になっている。播磨国（兵庫県）の国衙領は、伏見宮家の領地。※別納（べつのう）：通常の手続きをとらず直接領主に租税を納付する領地。

東大寺大仏の修理

四日、曇。田向三位が帰ってきた。伏見宮家の領地支配の承認について、室町殿がいい加減には扱わないと仰っていたということを広橋から聞いたと田向は報告した。また勾当内侍は、播磨国の国衙領支配を承認することを重ねて上皇様へお願いしてくださった。

さて室町殿はこの十一日に奈良へ出かけるとのことだ。足利義持殿の代になってから、まだ春日大社への正式な参詣はない。それで相当華やかに行列を飾って参詣することになるという。お供する公卿は三人、殿上人は七人らしい。また東大寺の大仏の彩色が落ちているので、修理なさるらしい。砂金を数百両、金箔細工の者たちに与えたそう。その砂金を相国寺で金箔に打つ。相国寺の僧がその作業の監督をするという。室町殿の夢にご自身が謹慎しなければならぬ事があったそう。それで大きな祈願をおこされて、御祈祷するということらしい。

六日、晴。勝阿が来た。室町女院領のことで勝阿にご命令なさった。

今出川南向の四十九日仏事

七日、晴。風呂に入った。今出川家南向殿の四十九日仏事を明日に繰り上げて実施するという。それで浄土三部経を一揃い、すべて私一人で写して今出川家に送った。追加の御布施として錢二貫文も送った。少額であるが、せめてもの気持ちを表したつもりである。御所様は、南向殿の手紙の裏を料紙にして写した法華経提婆達多品一卷と茶碗・鉢・茶（※）、それに引合紙十帖を送られた。今出川公行左大臣はとも喜んで、お礼の申しようありませんと返答したという。南向殿の亡魂もきつと喜んでくれていることであろう。慈雲院主や尼たちがやってきた。施餓鬼を行うという。

※「鉢・茶」：原文では「体」となっているが、続群書類従の読みである「鉢」に従った。続く箇所は図書寮叢刊も続群書類従も「立名」と読んでいるが、意味が通じない。「茗」の崩し字は立名にも見えるので、茗茶と解した。

八日、雨が降った。今出川家の仏事に、相国寺の僧たち十三人を招いて、観音懺法を行ったそう。五十日間の仏事をお陰様で無事にやり遂げましたという連絡があった。それを聞いて、うれしかった。

御香宮の祭礼

九日、雨が降ったが、昼には晴れた。九月九日節供のお祝いをいつもの通り行った。御香宮の祭礼があった。飾り物の笠やお囃子のパレードなどが来た。御所様は伏見宮家の殿上の間からご覧になった。飾り物の笠は大きすぎて門から入れることができなかった。そのため、藪を切り開かせて、中へお入れになった。ここ四五年は庭田家でパレードを見物なさっていたが、今年は忙しくてお接待できない

いと庭田家が申し出てきた。そのため今年は御所でご覧になったのである。ご見物の後すぐに殿上の間で一献の酒宴があった。田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・世尊寺行豊・寿藏主・周郷らが参加した。宮家の女性たちも同じく参加した。見物人たちが大勢集まった。私は、今日から百ヶ日の間、琵琶や和歌などの練習を始めた。

十日、晴れていたが、夜になって雨が激しく降った。御香宮祭礼の獅子舞がやってきた。舞を披露したので、ご褒美に扇などをお与えになった。

足利義持の春日大社参詣

十一日、朝は曇っていたが、午後四時頃には晴れた。室町殿が奈良にお出かけになり、今日、春日大社へ参詣なさった。参詣の行列は晴れがましいものであった。お供の者たちは、白の狩衣姿であった。

お供した公卿は広橋兼宣大納言・日野有光中納言・裏松豊光中納言、殿上人は飛鳥井雅清朝臣・白川資雅朝臣・日野義資朝臣・勧修寺経興・柳原量光・広橋宣光だそう。実は山科教興朝臣も数日前、お供の者に指名されていた。しかし昨夜になって突然、山科は指名から外されたそう。前日に室町殿御所で行列の準備をするのに、山科は来なかった。そのために準備作業が手間取り慌ただしくなったそう。そのことで、室町殿は山科を不快に思われたようだ。

十三日、晴。今夜は名月だ。和歌の短冊が二十首集まってきたので、それらの和歌を披露して詠み上げた。私・田向三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・世尊寺行豊らが和歌の優劣を議論した。世尊寺は初めて御所様に命じられて和歌を詠み、その短冊を献上してきた。

十五日、晴。延期されていた石清水八幡宮放生会が無事挙行されたそうだ。放生会行事所の長官である公卿以下の役員は、先月と同じである。田向長資朝臣が昨日の夕方から石清水八幡宮に詰めており、お祭りが終了した今日になって、伏見に戻ってきた。田向三位も一緒に行っていた。

十六日、晴。室町殿が奈良から京へお戻りになった。お供の者たちはいろいろな織物の狩衣を着ていた。行列が華麗に飾られていた。諸大名のうち、細川満元管領・斯波義教勘解由小路右衛門督・畠山満家・一色義範侍所所司・山名時熙らが参上し、警備の武士数百人を連れてきた。奈良にご滞在の間、一条院・大乘院・仏地院・惣林院・尊勝院・梨原の六ヶ所へ室町殿は招かれたそうだ。室町殿当代初めての晴の奈良参詣なので、興福寺は延年の舞や猿楽など興味深い催し物をたくさん用意したそうだ。

南朝・後亀山法皇の上京

椎野寺主がいらっしゃって言うことには、南朝の後亀山法皇様が、大和国吉野郡から派手な行列を組んで京都へお戻りになり、大覚寺にお入りになったそうだ。室町殿から、御領地などを元通りにしますで、どうか京都へお帰りくださいと再三の要請があったので、お戻りになったらしい。この五く六年は経済的に苦しくて、吉野にお隠れになっていらっしゃった。世間の噂では、管領の細川が間に立って、法皇様と室町殿が和解されたそうだ。

伊勢猿楽

十七日、晴。今夜は山田宮神事の猿楽である。楽頭の矢田は伊勢猿楽の役者を雇い入れたそうだ。指月庵に行き、そこからお忍びで見物

なさった。猿楽は三番上演されたが、あまり上手ではなかった。

十八日、雨が降った。私は少し風邪気味だ。今夜は御香宮で猿楽が上演された。田向三位が京都に出かけた。伏見宮家の領地支配の承認に関して、広橋に催促する使者として出かけたのである。

十九日、晴。田向三位が京都から手紙を寄こしてきた。広橋と対面して、心静かに話し合ったという。広橋が言うには、「領地の詳しい内容を簡条書きにした書類を下さい。それをもつて室町殿にお願いたします」とのことであった。そこで、伏見荘のこと、僧坊田のこと、室町女院からの継承地のこと、これらを三ヶ条に記して広橋の所へ送った。私の風邪は治った。

マラリア再発

二十日、晴。私の風邪がまたぶり返してきた。もしかしたらマラリアかもしれない。とても症状がひどい。さて田向経良卿の息子である大教院大納言律師隆経は、明日が阿闍梨（※）になる儀式だという。田向家の子孫に語り継ぐためにも、儀式の費用を是非ご援助下さいと田向経良が言ってきた。それで、牛一頭を御所様がお与えになった。その牛は、牛飼童に牽いていかせた。恐れ多いことですと田向から返事が来た。世尊寺行豊が堂童子役（※）をするために、大教院へ向かったという。

新御所様や椎野寺主たちが月見岡へ松茸採りに行った。私は病気なので行かなかった。日野資教一位禅門の子である珍暉という稚児をお連れになっていった。珍暉は、大光明寺長老の弟子である。

※阿闍梨（あじやり）…密教において指導的な立場の僧に授けられる位。
※堂童子（どうどうじ）…法会で、散華（さんげ）の花を入れる籠を

配る役をする者。

二十一日、晴。田向三位が帰ってきた。広橋が外出していたので、領地三ヶ条の書類を渡せなかったという。伏見荘内の法安寺と権現で猿樂があつた。権現の猿樂を新御所様と椎野寺主がお忍びで見物なさつた。私は行かなかった。

マリア除けの呪い

二十二日、晴。今日は、マリアの発作が起こる日である。そのために明け方、マリア除けのため、弘法大師の筆を濯いだ水を飲んだ。さらには、法安寺の僧である良明房にお祈りもしてもらつた。それなのに発作は起こつた。ただし症状はやや軽かつた。

二十四日、雨が降つた。地藏講があつた。善基がいつものように導師を勤めた。まず法要の前に軽食をとつた。次に地藏講式を読んだ。「南無地藏菩薩」という地藏様の称号を家臣たちが唱えた。地藏講の幹事は椎野寺主で、参加者は舜藏主や宮家の女性たち八人である。またマリアの発作があつた。いろいろとマリア落としを試したが、一向に効き目がない。困つたものだ。

今日、広橋は室町殿の所へ呼ばれて行つた。伏見宮家の訴訟を取り次いだご褒美として、鱸を与えられたという。上皇様から書状が来た。先日のお返事である。「播磨国の国衙領に関して、伏見宮家へ領地支配の承認書を出すことには何も問題はない。上皇御所の担当者が発行手続きを命じた」と書かれてあつた。まずもって喜ばしいことだ。

さてこの間、称名院で書写した法華経供養の法会があつた。仁称寺の僧七く八人で、宝泉の亡母の法事として行つた法会だという。

夜ごとに、宮家の女性たちが法会に参列しに行かれた。

周郷、天龍寺から逃げ出す

ところで、田向経良卿の息子である僧の周郷が天龍寺から逃げ出したという。明け方に、周郷は田向三位の家に来た。乾藏主と喧嘩したらしい。この春から度々、周郷は天龍寺から逃げ出している。父の経良卿が説教しても、全く聞き入れない。おかしい事だ。

マリア落ちる

二十六日、晴。マリア発作の日なので、良明房に来てもらい、お祈りをしてもらった。それで今日、マリアが落ちた。お祈りの効き目であろうか。うれしい。椎野寺主が酒宴を用意してくれたので、お酒を飲んだ。田向三位が京に出かけた。

二十七日、晴。真修院様が望んでおられた領地支配の承認書を、御所様が今日、自筆でお書きになって送られた。真修院様の死後、娘の比丘尼御所様（入江殿今御所）のご存命中、法安寺の田地二町を領地支配なさることをお認めになつた。播磨国国衙領の年貢錢二十貫文分については、真修院様の死後、三年間だけは免除して、比丘尼御所様の収入になさつてよろしい。しかしその後は、伏見宮家へお返しになるよう、お命じになった。

二十八日、晴。田向三位が京都から帰つた。広橋に領地三ヶ条の書類を託してきた。室町殿へお取り成しますと広橋は丁寧に申したという。マリアが治つてから、今日はじめて行水をした。九月も終わりになるので、和歌の短冊を御所様に提出した。

二十九日、称名院の書写した法華経供養の法会へ椎野寺主と田向三位らが参列しに行つた。お経の韻文詠唱の伴奏で、田向三位が笙を吹

いたそうだ。

琵琶「村雲」

三十日、晴。「村雲」という銘のある桑の木製の琵琶一面を、御所様が園基秀参議へお預けになった。これはもともと、按察局の父である土御門禪門の琵琶である。按察局が伏見宮家にお仕えしていた時に、御所様へ献上したものであった。この按察局は、昨年、宮家を引退している。御所様の九月末のお歌を、特に披露なさった。酒宴があった。

十月一日、晴。「初冬で、良い兆しだ。すべてが幸せだった」と予祝した。いつものように、月初めのお祝いをした。椎野寺主が浄金剛院へ戻った。

四日、晴。御所様が永年詠み置かれたお歌を私家集として並び集めなさいとのご命令があった。それで今日から編集を始めた。昔、伏見殿でお詠みになった歌はほとんど焼失してしまった。それ以後にお詠みになった歌から撰ぶことにした。

聞くところによると称名院の書写法華経供養の法会は、今日が写経の最終日らしい（※）。宮家の女性たちが参列しに行かれた。

※「最終日らしい」：原文では「筆立云々」とあるが、これまでの記事からみて今日から写経を始めたとは考えられない。筆を置く（書き終える）という意味に解した。

六日、晴。三月末に詠んだ歌合の和歌について、飛鳥井宋雅に左右の勝負を判定するようお命じになっていた。ところがこれまで全く何の返答もなく、今日になってようやく判定書が届いた。飛鳥井は、和歌における時季の感興を解さない無粋者のようだ。

足利義持、伏見に出向く

七日、晴。室町殿を大光明寺へ長老が招待なさったそうだった。まず退蔵庵に行かれて、軽い食事をおとりになった。その後、蔵光庵にお寄りになり、大光明寺にお入りになった。そこでまた食事をおとりになつてから、すぐに京都へお戻りになったそうだった。長老ら六人の僧が、室町殿と一緒に食事した。その雑談のついでに、伏見宮家のことを室町殿がお尋ねになったので、経済的に苦しんでいらつしやるようだ、と、長老たちがうまい具合に話してくれたらしい。お供の大名は管領の子息である細川持元、畠山子息の持国、山名子息の満時、一色義範、赤松持貞越後守、富樫満成兵部大輔ら近習十人あまりだそうだった。室町殿のご装束は中国製の白の道服（※）で、その上に袈裟を掛けていらつしやう。大光明寺からの引き出物は、小袖・靴下・扇であった。退蔵庵の引き出物も同様だったそうだった。

※道服（どうぶく）：大納言以上の人が内々に着た上衣。袖が広く腰から下にひだがあり、着物の上に羽織る。のち、道中着となり、さらに今の羽織となった。

八日、晴。医師の昌者が来た。このところまた、御所様に腰痛がある。御脈は問題ないとのことだ。田向三位が京都へ出かけた。伏見荘の僧坊田のことで、御所様が広橋に伝えたい事があるという。

伏見荘の僧坊田

十日、晴。田向三位が帰ってきた。伏見荘の僧坊田について、広橋と話したところ、「僧坊田を没収なさるのはどういう理由からなのでしょうか。その理由をなんとかお伺いしたいものです。その理由がはつきりすれば、室町殿による伏見宮家領地支配の承認手続き

に入るようになるでしょう」と言った。

それで御所様はまず、伏見荘の村々へ僧坊田を没収することを伝えた。この僧坊田は、以前、九体堂・愛染王堂・不動堂の三御堂六人の僧が伏見宮家のために祈りをする費用として租税免除とお定めになった田地である。しかし伏見殿が火災で焼け落ちてから以降、僧たちはお勤めをしなくなった。本坊でお祈りをしていると言い張るが、実際にはやっていないようだ。歳末の祈祷報告書さえ出してこないからには、有名無実なのはもちろんである。それで僧坊田を全て没収なさったのである。

ただし宇治智恩院隆守僧正が供僧としてお祈りしてくれているので、智恩院の僧二人分の費用については租税を免除している。隆守僧正は伏見宮家に仕える近衛局の縁者なので、その関係で特別に免除しているのである。それ以外の醍醐寺関係の僧たちは、僧坊田の租税免除を嘆願している。

伏見荘安久名

十一日、晴。法安寺が知行している伏見荘安久名内の田地は、長年、同寺の領地である。ところが法安寺の安久名領有を示す書類が整っておらず、本来は芝俊阿がご恩地として伏見宮家から拝領した領地なのだという。それで俊阿が伏見宮家に訴えてきて、田向三位が事務取り扱いとなり、御所様は改めて安久名を俊阿の領地になさったという。寺院の領地を今になって没収するのは、仏の所有物を取り返してはいけないという法慣習からみて、よろしくないことではなからうか。

興福寺の法会である唯摩会（ゆいまえ）が昨日から始まっている。

朝廷から興福寺に出向する役人として勸修寺経興が奈良に行ったそうだ。

田向経良の屋敷新築

十三日、雨が降った。田向三位は、伏見荘へ移住後の宿所がなかったので、芝俊阿の屋敷に寄宿していた。しかし伏見宮家御所の近くに住んで、お仕えしたいと言う。そのために御所近隣の屋敷地をお与え下さいと田向が希望してきた。そこで、庭田家東隣の宝蔵院の敷地をお与えになった。今日、東と北の築地に竹木を植えた。建築工事が始まったので、お祝いのお酒を田向が献上してきた。屋敷は、御所のご迷惑にならないよう、静かに建設いたしますとのことだった。

上杉禅秀の乱

さて聞くとところによると、今日の夕方、鎌倉公方足利持氏から飛脚が室町幕府に來たそうだ。今月二日に前関東管領上杉氏憲右衛門佐が謀叛を起こし、故足利氏満の末子で現鎌倉公方持氏の叔父（※）である足利満隆を大將軍として、数千騎の軍勢で鎌倉を急襲したという。

鎌倉公方足利持氏左兵衛督は軍備を整えていなかった上に、諸大名も敵方に味方して鎌倉公方の軍勢にはならなかった。上杉憲定安房守の息子で現関東管領の上杉憲基が鎌倉公方の味方になったが、わずか七百余騎の小勢力だった。そのため合戦を避けて退き、駿河国境に落ち延びたらしい。

同四日には、上杉氏憲の軍勢によって、鎌倉公方足利持氏左兵衛督の屋敷など鎌倉中が焼き払われた。以上のことが、飛脚によって

報告されたという。

室町殿は因幡堂へお籠もりになっていたので、そこへ諸大名が急ぎ集まり、会議を開いた。駿河国は室町幕府が管轄しているので、まず駿河国へ軍勢を出すようにと、駿河国守護の今川仲秋右衛門佐にお命じになったそう。また足利持氏方へも使者をお送りになった。その後、室町殿は相国寺の南西堂へお移りになったという。

後に聞いたところでは、上杉氏憲右衛門佐が謀叛した発端は、足利持氏左兵衛督が氏憲の母を誘拐したからだという。それで持氏を討伐するために上杉氏憲は謀叛を起こし、その後、上杉の領国へ逃げたという。しかし、足利持氏が氏憲の母を誘拐したというのは間違った情報だった。そのため一端は持氏を許したが、なお鬱憤が晴れず、とうとう上杉氏憲は謀叛を起こしたという。

※「叔父」：原文では「舅」とある。

桂地藏事件

十四日、晴。聞くところによると、桂地藏に奉仕していた阿波国の法師とその一味の者ども七人が室町幕府によって逮捕され収監されたそう。その法師は阿波国の住人ではなく、桂近郷の者だった。一味の者ども数十人は、いろいろと謀略をたくらみ、地藏菩薩像にキツネを付けて、不思議なことをやらせたり。また病人と共謀して、多くの病が治ったように見せかけたり、あるいはもともと盲目ではない者に盲人の真似をさせ、治って目が見えるようになったと演じさせたり。以上のようなことがあの法師らの仕業だという情報が出たので、逮捕して尋問したところ、自白したという。西岡の男は共謀者ではないそう。それで彼はこれまで通り、桂地

蔵に奉仕しているという。

貞成の地藏信仰

いろいろと考えてみるに、地藏を信仰しない一部の者がこのように言いなしたのではなからうか。たとえ一部の病人と共謀したことがあったとしても、多くの人が地藏菩薩の恵みを受けたことを、どうして謀略と言えようか。地藏の霊験は人の力の及ぶところではないはずだ。それにしても、不可解な事件である。その一方で、多くの人が参詣していることは、以前と変わりがなさそう。

私は今日もまた風邪気味である。マリアが再発したのだろうか。聞くところによると、今出川公富卿が九日からひどい病状だそう。舜蔵主が酒宴の用意をした。お祝い事があつたそう。

十五日、晴。椎野が寺主を勤める浄金剛院六僧坊の田地について、後小松上皇様の領地支配承認書を椎野寺主が申請なさつたそう。伏見宮家御所からも上皇様へお取り成しなされた。それで承認書をだすことには問題がないという上皇様のお手紙を冷泉正永が持参してきた。上皇御所では冷泉永基が取り次ぎ役なのだ。

上杉禪秀の乱続報

十六日、晴。私のマリアの症状が少しでたが、すぐに熱は下がった。田向経良の妻・芝殿が一献の酒樽を献上してきた。

さて聞くところによると、昨日の夕方、関東からまた飛脚が来たそう。七日に上杉氏憲右衛門佐が大軍で攻めてきたので、足利持氏左兵衛督が三島で迎え撃つて、合戦となった。そして八日になつて敗北した足利持氏左兵衛督と上杉憲基関東管領ら二十五人が切腹をした。細川満元管領と斯波義教勘解由小路右衛門督に、その旨の

報告があつたそう。

室町殿は北野天満宮の写経所にいらつしやつたので、管領や斯波たちがかけつけて室町殿に報告した。室町殿はすぐに幕府御所へお戻りになった。とても驚きになられたそう。足利持氏左兵衛督は室町殿の烏帽子子(※)として特別に目を掛けていたので、室町殿のお怒りは一通りではなかったそう。関東が京都に敵対することになり、これは天下が大きく乱れる原因ともなる。とても驚いた。

※烏帽子子(えぼしご)：成年式(烏帽子成)の際、烏帽子親を務めて烏帽子名(実名・じつみょう)を付けてやった子のこと。

十七日、雨が降った。宇治の智恩院隆守僧正が一献の酒樽を持参した。僧坊田の僧侶二人分の租税収入に基づいて、伏見宮家のために特別なお祈りをいたしましたと報告してきた。隆守は陽明局の縁者なので、特別に僧坊田の租税を免除しているのだ。さて室町殿へ浄金剛院六僧坊田のことを広橋を通して伺ったところ、問題ないとのこと。お答えであつた。喜ばしいことだ。

鎌倉公方足利持氏の切腹は誤報

二十日、晴。柿本人麻呂の肖像に和歌を奉納して供養する会があつた。私が和歌の題を出した。そしていつもの通り、和歌を披露した。

さて聞くところによると、関東の情勢、足利持氏左兵衛督が切腹したというのは、事実ではないらしい。上杉憲基関東管領はやはり切腹した。鎌倉公方足利持氏左兵衛督は健在で、幕府を頼みにしていますという連絡があつたそう。最近の世間のうわさは、とりとめがない。

二十二日、晴。田向三位の屋敷地について、後のために今日、領地所

有の承認書をお与えになった。新御所様が書かれて、御所様が書類の前方に承認のサインをお書きになった。

御所様の代参として、行光が桂地蔵へ三ヶ月間参詣を続けており、今日がその最終日である。お地藏様はきつと願いをお聞き届け下さるであろう。御所様の願いは、持仏堂の造営と鎮守社などの建立だそう。

琵琶法師順一勾当

二十七日、晴。紅葉が盛んである。蔵光庵の紅葉をご覧になるため、新御所様がお出かけになった。蔵光庵ではちょうど琵琶法師の順一勾当が平家語りをしていたので、一句だけお聞きになった。その後、即成院にお入りになった。即成院では三献の酒宴が用意してあつたそう。そしてまた、行蔵庵へお戻りになった。行蔵庵では、近頃ある僧が押板や障子に描いた絵をご覧になったそう。寿藏主が酒宴の用意をしていた。また順一を呼び寄せて、平家物語を一句語らせた。順一にはご褒美として扇をお与えになったそう。皆酔つて、夕方にお帰りになった。私は行かなかった。

鎌倉公方足利持氏の駿河国避難

二十九日、晴。聞くところによると、昨日の夕方、関東からまた報告があつたそう。鎌倉公方足利持氏左兵衛督は駿河国へ落ち延びて、同国に避難なさっているらしい。持氏から「幕府のご加勢をなんとか頼みます」という飛脚が来たという。

室町殿は諸大名を呼び集めて相談なさつた。しかし皆、口を閉ざして、意見を言わない。そこで足利満詮小河道納言入道殿が仰るには、「足利持氏は室町殿の烏帽子子なのだから、どうしてお見捨て

にできようか。それに加えて、敵方は鎌倉をすでにとりまとめているからには、幕府へ謀叛を起こすことも考えられよう。それを防ぐためにも、足利持氏をお助けするべきではないか」と意見を述べられた。その意見で室町殿も諸大名も一致した。

そこで、今川範政駿河国守護・上杉房方越後国守護に対して、鎌倉公方の軍勢に加勢するよう、お命じになった。とりあえず越後国へお移りになるよう、足利持氏左兵衛督にお伝えになったそうだ。

この四日の合戦で、幕府側は一色若千の者たちが戦死している。関東管領が切腹したというのは事実ではなく、どこかに落ち延びているらしい。敵方は、故足利氏満の三男を新御堂と呼んで大將軍となし、鎌倉中の軍勢を一つにまとめあげたらしい。最近のうわさは、本当にとりとめがない。だから、このように記録するのも無意味かもしれない。

三十日、晴。亡くなった今出川家南向殿の百日目の命日である。時間は夢のように過ぎ去るが、哀しみはなくなる。

さて伏見荘の僧坊田に関して、醍醐寺三宝院が力持ちの下級法師を現地に派遣して、僧坊田は醍醐寺のものであると村中に触れまわっている。それで田向三位が三宝院行つて抗議したところ、「法師のことは存じません。醍醐寺が直接派遣した者でしょう」と言う。「将来のことまでは申しませんから、当年は長日護摩で伏見宮家のためにお祈りいたしますので、どうか僧坊田の租税免除をお願いします」と強く言ってきた。「しかし、これまでもお祈りをした形跡がないし、歳末の祈祷報告書も出されていないので、長日護摩のお祈りをするというのは信用できません」と田向は返答したそう。

足利義嗣の去就

さて聞くとところによると、室町殿の弟で新御所と呼ばれている足利義嗣押小路大納言が、今日の明け方どこかへ逃げ出されたそう。室町殿はびっくりして、京都中が騒動になった。追つ手を差し向けて搜索なさったところ、京都北部の高尾あたりに隠れて世捨て人になったらしい。既に俗人の証である髻（もとどり）をお切りになったという。経済的に苦しいので領地のことなどをお願いなさつても、室町殿は同意なさらなかった。兄弟仲が悪く、それを恨みに思つて、このような事をしでかしたらしい。義嗣卿に関しては、謀叛の企てがあるといううわさが絶え間なく聞こえてくる。義嗣卿の行動に関連して、室町殿は最近の関東の動静をいよいよ恐れていらつしやるという。

小野道風の肖像画

十一月一日、晴。「すべてのことがめでたい」と予祝した。絵を描く僧がこの辺りにいるということなので、もとは頼寿法橋が描いた小野道風の肖像画を写させた。対となる脇絵の山水画一幅も同じく写させた。さらさらと描いていく。この僧は、確かな腕の持ち主である。

二日、晴。聞くとところによると、足利義嗣押小路大納言の進退について、室町殿から細川満元管領と富樫満成大輔らが使者となり、帰宅なさるよう説得なさった。しかし、全く承知しなかったという。室町殿に対する恨みの数々を一々お話しになったらしい。それで出家するのが本望なので帰宅することはできないとお話しになったそう。

足利義嗣殿は髻を切つて、黒衣を着ている。しかし誰も幕府を恐れて彼に戒律を授ける師僧がないという。山科教高中将と山科嗣教中将も同じく出家して黒衣を着ている。近習の遠江守某も同じく出家した。近習の遁世者二人も黒衣を着ているという。

足利義嗣大納言の年齢は二十三だという。故北山殿足利義満が寵愛していた頃は栄花を誇り、自分勝手にわがまま放題だった。父君が亡くなつてからも九年間ほどは、身分相応に暮らし向きは豊かで、官位の昇進にも問題はなかった。しかし、最近はこのような貧しさで、とても無念に思っていたのであろう。ただし、きつと謀叛の企てがあるに違いない。内心は計り知れないものだ。

聞くところによると、今夜、妙心寺慈雲院に強盗が押し入り、院主や尼たちの財産が奪い取られたそうだ。今出川公行の子供が慈雲院で稚児となつている。しかし、ちょうどその時、休暇をとつて実家にいたので、この難にはあわなかつたという。とても幸運なことだ。

手ぬぐいの怪異

三日、晴。早朝見たところ、私の顔拭き手ぬぐいがネズミに食い破られていた。先月のころも食い破られていて、またしても事だ。吉凶はどうであろうか。聞くところによると、田向三位の娘が今日、嫁入りするという。石清水八幡宮に向かつた。当面は内々のことにしておくらしい。

【頭書】顔拭き手ぬぐいがネズミに食い破られたこと、後に知つた大通院御所様の死去と思ひ合わせると、とても凶事なことの兆しであつた。四日、晴。今夜、臨時の官職任命式があつた。大納言二人、中納言三人、参議二人、藏人頭両人が任命されたそうだ。

五日、晴。聞くところによると、足利義嗣押小路大納言は絶海中津和尚の塔頭である仁和寺興徳庵に移住なさつたそうだ。侍所の一色が命を受けて、興徳庵まで警護した。もし謀叛を企てている者に足利義嗣殿の身柄を奪われそうになつたら、義嗣殿に切腹させろという命令だそうだ。それで甲冑を着て昼夜警戒している。同じく出家した山科教高朝臣と日野持光入道、その他の世捨て人一人は富樫満春・満成両家にお預けになり、尋問させているそうだ。およそ自分が世を捨て出家することは本心からの事だと義嗣殿は強調なさっているけれども、実際に謀叛の企てがあることが次第に明らかになってきたらしい。そのため、室町殿は厳しく対処なさっているそうだ。

宝蔵院の騒動

六日、晴。乾蔵主が来て、酒宴を用意なさつた。さて舜蔵主がこの夏頃から脚氣がひどいので、乾蔵主が管理している越願寺に寄宿なされている。ところが乾蔵主の同宿僧たちに思いやりがなくて嫌になり、舜蔵主は宝蔵院の塔頭へ今日移住なさつた。この事には、訳がある。

御寮と田向三位の妹である玄経との仲が悪いので、しよつちゅう喧嘩ばかりしている。それはとてもひどい有様だ。とりわけ、深草一ヶ村を宝蔵院の領地として舜蔵主が管理運営している。それに対して、宝蔵院領地の代官職を別人に替えようと御寮が画策した。そのことに舜蔵主は怒つて、宝蔵院から尼たちを追ひ出して男の僧だけのお寺にしようとは対抗した。その手始めに舜蔵主を宝蔵院に移住させたのである。御寮は宝蔵院を出て、陽明局の部屋にひとまず移住なさつた。まったく感心しないことである。杉殿のお気持ち（※）

を測りかねる事態だ。

医師の昌耆が来た。御所様の容体は相変わらずである。

※「杉殿のお気持ち」…杉殿（崇光天皇後宮庭田資子）が尼寺宝嚴院を建立したなどの経緯が背景にある。

八日、晴。春日祭に藤原能子勾当内侍が参列した。朝廷から派遣された弁官の役として勧修寺経興も参列した。

九日、曇。大光明寺長老が来た。御所様とお会いになった。

さて聞くところによると足利義嗣押小路大納言はすでに出家したそう。臨光院にお移りになったという。教高入道・持光入道以下四人は加賀国へ流されたそう。

教高朝臣の尋問に関して、細川満元管領の意見は、「もし教高の自白書に諸大名のうち四く五人も同心する者がいたとしたら、どうするおつもりであつたろうか。今は関東の謀叛を討伐なさることが先決の大事であろう。そうであれば、教高を尋問することは何の利益もないことではなからうか」だという。畠山満家左衛門督の意見は「押小路殿に謀叛のお気持ちがあることに間違いはない。すぐに臨光院へ行つて切腹させよう」ということだった。それに対して管領は「それも拙速なことだ。よろしくない」と反論した。意見がましまちで結論がでなかったそう。

関東から一昨日飛脚が来た。味方の軍勢を早くよこして下さいと足利持氏が連絡なさってきたそう。

花山院家の相続

さて花山院忠定には相続をする子がない。そこで十二歳の南朝方近衛家の子を花山院家一族の僧耕雲の養子にして、相続させるこ

とになった。耕雲はもと南朝にお仕えしていた者で、現在は花頂あたりに住んでいるという。この耕雲は、伏見宮家の女房である小上臈の弟である。思いがけなく幸運なことであろう。

十日、晴。大教院隆経律師が来た。阿闍梨になる儀式に際して、牛をお与え下さり、まことにありがとうございましたとお礼を申した。

栄仁親王私家集

十二日、晴。御所様の御和歌私家集の編集が終わったので、お目に掛けた。今日もまたお灸の治療である。度々のお灸は昌耆が治療している。

大光明寺領の保証

十三日、晴。大光明寺長老が来た。「伏見荘における大光明寺の領地について、寺家として後の証拠になるような書類を直筆でお書き下さいませんか」と言ったそう。それで次のような書類をお出しになった。

梵王山大光明禅寺は光嚴天皇がお開きになった寺である。それで伏見宮家としては他と異なり、深く信仰している。私の子孫が伏見荘を管理する場合でも、大光明寺領の田畠や竹木などを寺家の意向を無視して没収するようなことがあれば、伏見宮家の管理者や村人たちを不忠の罪で処罰するであろう。よって後のために以上の事を保証する。

十一月十三日

御所様のサイン

大光明寺住職へ

この書類前方の空白部分には次のように書かれている。「光嚴天皇陛下が書き置かれた書類の写しも添えておく。この書類によると、

寺の檀那に対して、大光明寺は特に大事に崇めなければならない。そうであるからには、寺の役人もこの言いつけを守り、村人たちに對しても理由なく道理に合わないような事をしてはならない」。

十四日、晴、順番で粥の用意をする集まりを今日から始めた。今回は近衛局が当番の幹事として用意をした。宮家の皆が集まった。

十五日、晴。新築中の上皇御所が明日、上棟式だそう。伏見宮家からもお祝いのお馬を引き出物として差し上げるべきではと皆が意見を申した。それで、明日、献上することになった。その青毛の馬を御所様をご覧になった。あまり良い馬ではない。これは、伏見荘の村々から探し出した馬だそう。

さて僧坊田のうちの田地をご恩地として拝領したいと田向長資朝臣が申し出てきた。それで僧坊田のうち、少しの田地を御所様がお与えになった。

上皇御所の上棟式

十六日、曇。きびしい寒気である。上皇御所の上棟式に差し上げる御馬が明け方京都へ牽いていかれた。馬に添えるお手紙は、病気で御所様が執筆できないので、新御所様がお書きになった。そのお手紙を冷泉永基にお託しになった。上棟式の執行責任者は、広橋兼宣大納言だ。御馬は広橋のところへ牽いていかれた。そして広橋から工事責任者の結城某入道へ引き連れていくことになったという。上皇様直筆のお返事には、思いがけないご祝儀で、うれしく思っていますと記されていた。冷泉永基にも、くれぐれも伏見宮家の御所様にお礼を申すようにお命じになったそう。

貞成への譲与

さて御所様の病状は悪化の一途をたどっている。それで、私の將來に關して不安に思っていることを御所様にざっと申し上げた。直接申し上げるのは憚りがあつたが、御前に取り次ぐ者もいなかった。この事は申し入れがなくても、最近、特に考えていたことである。しかし、おまえの領地としては数え上げるほどの土地もないので、考えあぐねていたところだ。播磨国の国衙領などに関して上皇様の領地支配承認書を申請している。それがこちらに届いた時に、領地の再配分をしよう」というのが御所様のお考えであつた。

「とりあえず、分配譲与する動産について直筆の譲り状を書くと思う」とも仰つた。それで、紙と筆をとつて、守り本尊や琵琶の楽譜などのことについて、譲り状を書いてくださった。領地のことは別紙に書いて譲り渡すということもお書き添えくださった。

御所様のお考えはたいへんありがたいものであつたので、いよいよご快癒をお祈りして、忠義や孝行の志を心深くもつた。すべては神様の思召しにゆだねよう。

十八日、雲は凍てつき、寒い嵐が吹き荒れた。寒さが終日冴え渡つた。夕暮れには初雪が降つた。薪を当番で燃やすことにした。今日は、庭田重有・田向長資ら朝臣が薪の準備をした。私の妻である今参局庭田幸子が今日の明け方、産所である実家の庭田家に移つた。無事の出産を願うのみである。

貞成の娘誕生

十九日、晴。初雪の風景は、とても趣がある。近衛局と田向三位ら雪消しの贈り物として、酒宴の用意をしてくれた。さて今参局の御産

が遅れている。どうも邪気があるらしい。しかし今夜、（二十日の）午前三時に女子が産まれた。無事の出産だ。女子であるのは残念だが、まずはめでたい。これは私の娘である。

栄仁親王の死

二十日、晴。朝早く田向三位が京都に出かけた。伏見荘以下の領地支配承認のことを、室町殿へお願いするためである。そのために、取り次ぎ役の広橋へ御所様のいろいろな命令を御使として伝えにいったのだ。御所様のご病状、持病の中風の発作がとめどなく起こる。ご病状が悪化してとてもお苦しみの様子に見える。医師の昌耆は呼ばれても、この数日全くやってこないのは、珍しい事である。

今日の明け方からは下痢が二、三度あって、御所様はいよいよおつらいご様子だ。夕方からは左手の脈もとれなくなった。医者がいないので、どちらの足が中風で悪いのか分からない。午後一時に少しお粥を口にされた。そしてすぐに横になられた。お粥を召し上げる間、私は後ろからお背中をお抱きして支えていたが、御所様の様子は危篤であると感じた。対御方が御前にお仕えしていたが、さめざめとお泣きになっていた。お見受けしたところ、看病なさっている対御方も今にも倒れそうな様子だった。それで、私が対御方を後ろから抱き支えていた。数時間後、尼の玄経が私に代わってくれた。

御所様が起きたいと仰るので、起こした。お顔の色はとてもひどい。お言葉もはつきりしない。お口を開いたようなので、蘇合をお口に入れたが、飲み込めないご様子だった。既に危篤なので、新御所様・近衛局・庭田重有朝臣ら御前にいない方々を急いで呼び寄せ

た。それ以前から御前にいたのは、私・対御方・田向長資朝臣・比丘尼玄経らであった。長資朝臣が御所様を後ろから抱き支えて、人参を煎じた水をお口に入れようとしたが、飲み込む気配がない。既にお亡くなりになっている様子だった。藏光庵主や寿藏主らが急いで近づきお脈をとり、「お亡くなりになりました」と申した。みな戸惑い泣き叫んで、どうしようもない有様となった。

大光明寺長老の徳祥和尚が来て、焼香をした。寺庵の僧や尼たちも駆けつけてきた。宮家の男女はみな天を仰ぎ、言葉を失っていた。すぐに大光明寺や寺庵の僧たちが来て、お経をあげた。

ご火葬は崇光天皇の先例に拠れ

大光明寺長老はすぐに京都へ向かった。お葬式について室町殿にお伺いするためである。長老が鹿苑院主を通して室町殿に申し上げたところ、とても驚きましたと仰っていたそうである。ご火葬のことは、崇光天皇崩御後の時と同じように、その時の先例に従って準備しなさいと、室町殿は大光明寺長老にお命じになった。この室町殿のお返事を長老の弟子である衣鉢侍者が伏見に急ぎ帰って、まずはこの通りお計らいくださいと申してきた。このことは、宮家にとっては愁いのなかの喜びであった。ただ崇光天皇の例は昔のことであり、いま現在、そのままの形で実行するわけにはいかないだろう。多少儀礼を省略した方がよいであろうと皆で相談した。

さて領地支配を承認する上皇様の命令書がまだ出される以前に、御所様はお亡くなりになってしまった。内々の事として、御所様が危篤であることを勾当内侍を通して後小松上皇様へお伝えした。ところが椎野寺主が言うには、六僧坊の田地に関する上皇様の承認書

は来たが、播磨国国衙領などに関するものはまだ来ていない。後小松上皇様のお考えはどうなのだろうか。

田向三位が京都にいたので、新御所様が連絡をお入れになった。

椎野寺主・乾藏主・蔭侍者らへも連絡した。それで夜中にもかかわらず、これらの面々が急いで伏見宮家に戻ってきた。乾藏主はご火葬のことについて鹿苑院主と相談するために、夜中にまた京都へ戻っていった。田向三位は、夕方になってから戻ってきた。「ご臨終に立ちあえなかったのは、とても残念です」と申した。

対御方と陽明局の出家

深夜になって、対御方と陽明局が惣得庵で出家なさった。戒律を授ける師僧は、蔵光庵主の仲訓蔵主である。しばらくしてから、お二人は宮家へお戻りになった。出家したお姿を見て、いよいよ悲しみが深まり、涙があふれた。

貞成の述懐

私は去る応永十八年（一四一一）にこの伏見宮家で暮らすようになり、以来六年間、日夜、御所様と親しみ、朝暮、孝養してきた。特に去年のご発病以来ご臨終にいたるまで、寸暇を惜しんで看病してきた。一生懸命忠孝を尽くしてきた。そして思うに、私の今後の進退もどうしたらいいのか、ただ、ぼう然としている。涙を拭うしかない。

明け方になって、ご遺体をお湯で浄めてから、お召し物を替えた。そしてご遺体の安置場所を替えた。その役は大光明寺や蔵光庵の僧たちが勤めてくれた。常の御所に屏風を立て回し、その中に安置した。光明真言を僧たちが唱えてくれた。

栄仁親王の遺書

二十一日、晴。乾藏主と大光明寺長老らが帰ってきた。ご火葬について、鹿苑院主と相談してきた。亡くなった御所様のご遺書を以前から乾藏主が預かっていたそうだ。それでそのご遺書を開いてみた。

「播磨国国衙領別納のうち石見郷を、御所様の追善供養の費用のため、大光明寺へ寄付する。そして死後は、石見郷の年貢で追善供養を行いなさい。供養はすべて簡略にして、大光明寺の負担にならないようにしなさい。またご位牌には『大通院無品親王』と書きなさい」などと詳しくお書きになってあった。このご遺書を鹿苑院主へお見せしたら、すぐに室町殿へもお見せになったそうだ。ご遺書がある以上は、その通りにしなさいと室町殿は仰ったそうだ。

火葬の手配

ご火葬の点火役は金剛院主古篆和尚、念誦役は甘日堂院主文明和尚、収骨と仏事は大光明寺長老が勤めるよう、鹿苑院主がお命じになった。四十九日の法事は大光明寺で行うこととなり、お籠もりする僧は十人と決まったそうだ。歳末も差し迫っているので、今月中にご火葬を終えるよう、細かいことまでお取り計らいくださり、このように諸役をお決めくださった。それで、来たる二十四日にご火葬を行うよう定められた。大光明寺は慌ただしく手配してくれた。

何事についても、ぼう然自失で、どうしていいか分からない。寺庵の僧たちが数人来て、終日終夜、光明真言を唱えてくれた。新御所様と私もその場に出て、侍臣たちも同じく光明真言を唱えた。

今出川家から三善興衡朝臣が使者としてお見舞いに来てくれた。今出川公行左大臣は服喪中なので来られず、その代わりに使者によ

るお見舞いとなつたという。私が殿上で対面して、いろいろと話した後、帰っていった。冷泉正永・勝阿・六条院庁の島田益直が来た。正永・勝阿は四十九日の間、伏見宮家にお仕えしますと申した。とても神妙なことである。仏種寺長老の宗兼上人がお見舞いにいらした。さて対御方の局女である別当が今日、出家した。主人である対御方の進退に殉じてこのように出家しようだ。とても神妙なことである。今夜は惣得庵の尼たちが来て、お経をあげていった。

二十二日、晴。いろいろな所からお見舞いの人々が来た。入江殿今御所・真乗院比丘尼御所・南禅寺阿栄御所がいらつしやつた。相応院弘助親王がお見舞いの使者を寄こされた。正親町三条公雅中納言兼大宰権帥・藤原能子勾当局はお見舞いの手紙をくれた。園基秀前参議・慈光寺通光三位入道・冷泉永基・祐誉律師もお見舞いに来た。勒王院主洪西堂が来て焼香していった。安楽光院長老は、僧を四く五人連れて、お経をあげてくれた。深草禅衆も来た。赤松稲田も使者を寄こした。この他、僧たちがいろいろな所から来てくれた。入江殿と真乗院は、惣得庵にお泊まりになるという。阿栄蔵主も同じくお泊まりになるという。一昨日来、光明真言を唱えてくれている僧たちに、明け方、お粥を振る舞った。

栄仁親王の無念

二十三日、晴。綾小路信俊前参議が来た。彼は神事に関わっている関係で、門内には入れない。それで私が庭に出て、対面した。そしてすぐに戻っていった。世尊寺行豊と西大路隆富が来た。西大路隆富は二日間ほど宮家にお仕えするという。

今夜、午前三時に大光明寺へご遺体をお運びする。内々の儀であ

る。出発時刻が近づき、僧たちが御所様のお姿を整えて、御輿にお乗せした。まず宮家の男女が焼香した。御輿の御簾を巻き上げて、御所様のお顔を拝んだ。少しも顔色は変わっておらず、生前と同じように眠っているようなご様子だった。このように、お亡くなりになった時に悪い相が現れていないのは、浄土へ往生なさった証であろうか。今年で六十六歳。長生きなさったとはいっても、夢や幻のようであつた。ああ、とうとう天皇に即位なさらなかつた。それが、生前唯一のご遺恨である。すべて悲しくて、涙を流すしかない。

出発時刻になつて、常御所の南側からご遺体運び出した。新御所様・私・侍臣たちが庭上に立つていた。御輿が通り過ぎる間、両膝を折つてうづくまり拝礼した。御輿が門を出る時は、門内に留まつて見送り、すぐに屋内に戻つた。田向長資朝臣も我々と同様、御所に留まつた。先例により、このようにしたのである。

大光明寺へお供していった人々は、田向経良卿・庭田重有朝臣・西大路隆富。彼らは服喪なので、前から濃い鼠色の直垂を着ていた。常勝、彼は今回のことでも出家したので、今日は黒衣の僧服を着ている。この他、椎野殿・周乾蔵主・崇光天皇の皇子である阿栄蔵主・洪蔭蔵主ら宮家の方々、そして大光明寺の僧十人あまりがお供した。大光明寺に着いて、すぐに入棺した。棺は地藏殿へ安置して、お経を読んだという。その後、侍臣たちが戻ってきて、入棺などの様子を詳しく話してくれた。悲しみが一段と深まつた。悲しみの涙で衿が濡れてしまった。

入江殿・真乗院殿は、ご遺体出発の様子をご覧になり、今夜は伏見宮家へお泊まりになる。明日のご火葬に立ち合いたいとのことだ。

冷泉正永は今朝、京へ出て、明日、伏見に戻ってくるという。ご遺体の出発に立ち合わないとは、正永はとても自分勝手だ。

栄仁親王の火葬

二十四日、晴。町経時朝臣・四条隆盛朝臣・勧修寺経興が来た。門前で庭田重有朝臣が取り次ぎ、そのまま戻っていった。九条満教右大臣が八条公興朝臣を通してお見舞いを申してきた。九条右大臣のお見舞いは田向三位が取り次いだ。三福寺の長老が来た。豪融僧正・豊原郷秋・同敦秋らも来た。夕方、岡殿がいらっしゃった。覚兼房がお供をしてきた。ご火葬に立ち合いたいとのことであった。

午後五時、大光明寺へ向かった。新御所様・私・椎野寺主・対御方・近衛局・田向経良卿・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・西大路隆富・冷泉正永・勝阿らが大光明寺へ入った。入江殿・真乗院殿・岡殿は、惣得庵から直接、大光明寺の参列席にお入りになったそう。ご火葬場は、大光明寺東門外の松や杉を切り払って、皮付きの檜材で垣根を作り、皮を削っていない丸太で組んだ鳥居などで飾ってあった。鳥居の前の左右、南側と北側に参列席が拵えてあった。南側は伏見宮家の参列席、北側は入江殿・真乗院殿・岡殿・惣得庵主らが一か所にお座りになっていたそう。

開始時刻になったので、まず新御所様・私・椎野が地藏殿に行き、御棺の前で焼香した。長老に挨拶してから、すぐに参列席に戻った。ご遺体を火葬場にお運びする儀式。まずは地藏殿の御棺の前で仏事があった。次いで鉢と鼓が叩き鳴らされた。葬送行列の様子、まづ行者二人が燈呂をもって先頭になった。次に旗が四本。警侍者・田向経良の息子である瑛侍者・行蔵庵珠侍者・策侍者らが旗を持っ

ていた。さらに鉢を退蔵庵本愈首座・大光明寺継首座が持ち、鼓を轄書記・華蔵主が持つて歩いた。次いでご位牌を大通院の子息である洪蔭蔵主が掲げ持った。そして棺が昇がれてきた。棺に結びつけた縄を椎野寺主・周乾蔵主・田向経良卿・庭田重有朝臣・西大路隆富・行蔵庵寿蔵主らが引いている。長老以下僧侶百人ばかりが阿弥陀如来大咒という呪文を唱えた。

火葬の儀となった。点火の役は、金剛院主古篆和尚である。古篆は天龍寺の前住職で、普明国師春屋妙葩の弟子である。念誦の役は廿日堂院主文明和尚。文明は建仁寺の前住職で、同じく普明国師の弟子である。次に僧たちがお経をあげた。それに続いて、寺庵や入江殿・真乗院殿・岡殿ら尼や僧たちに渡ってお経があげられた。僧尼たちがお経をあげている間に、新御所様・私・宮家の女性たちは御所に戻った。この火葬の儀式は厳肅なものであった。葬儀を拝見している心中、涙が落ちるのみであった。

さて後に聞いたところでは、火葬の最中に、人魂が参列席のあたりから飛び出したという。不思議なことだ。帰宅した後、直会の儀として酒宴があった。これも先例として定まった方式だそう。

治仁王の人魂

【頭書】この人魂、翌年のことと思ひ合わせると、新御所様の魂だったのであるとかと皆が言っている。信用しがたいことだけれども、皆が言っていることなので、記しておく。その一方で、何か恐ろしいことが起こるのではないかという声もあった。

二十五日、晴。永延寺長老と僧たちが来て、大光明寺でお経をあげてくれたそう。葉室宗豊が使者を寄こしてお見舞いを言ってきた。

真乗院主竹内殿から、今日、入江殿・真乗院殿・岡殿がお帰りになったと手紙で連絡があった。阿栄蔵主もお寺にお帰りになった。

さて今朝から僧に食事を出す当番を決めた。お籠もりの僧は、経済的に苦しいので、特に頼んではない。洪蔭蔵主・寿蔵主・即成院善基房だけである。大光明寺で御所様の四十九日法要を執り行っているの、伏見宮家では形だけのお勤めである。椎野寺主はお寺に帰る予定であったが、皆と一緒に一つ所で仏事を続けたいということでお残りになった。周乾蔵主もお籠もりの僧にお加わりになったそう。食事をだす当番のメンバーは、新御所様・私・椎野寺主・洪蔭蔵主・対御方・近衛局・宝蔵院御寮・玄経・香雲庵主・近衛局局女の中殿・対御方局女の妙理・寿蔵主・善基房・周郷侍者・侍臣の田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・冷泉正永・勝阿らである。毎日、一緒に法華経などを唱え、光明真言などを写経することにした。

さて聞くとところによると、足利義嗣押小路大納言の謀叛の計画が明らかになったので、加賀国へ流される予定の山科教高朝臣、持光右佐入道以下三人も護送途中で処刑されたという。語阿を尋問したところ、斯波右衛門督・細川管領・赤松らも共謀していたと自白したという。しかし、これら有力諸大名には処罰が及ばなかったという。また聞くとところによると性蔵主が逃亡したという。自分勝手な行いが明らかになったためらしい。近年、性蔵主は室町殿のお気に入り、特にお側に置いていた僧であった。

栄仁親王の収骨

二十六日、晴。初七日である。初七日の御仏事は特になかった。長照

院殿が、西雲庵や良寿房らと一緒にいらつしやう。門の前で皆さんとお目にかかった。それで、すぐにお帰りになった。陰陽師の賀茂在貞が来た。衆人の山井景清が、根西堂の僧六く七人を一緒に連れてきた。お経を読んでもくれた。

今夕は御収骨である。仏事に参列するために、皆が参列席についた。私は少し遅刻した。まず火葬場の鳥居の前にいて、焼香した。その間、大光明寺の僧たちが東門の前に大勢集まっていた。焼香が終わって、参列席に戻った。次に大光明寺長老の徳祥和尚が鳥居の前に進み出て、お経を唱えた。その間に、周乾蔵主・蔭蔵主・桂首座・寿蔵主らがお骨を拾った。

さて椎野寺主はお骨をお拾いにならなかった。黒衣の僧として何かお考えがあるのだろうか、納得できないことだ。田向三位と庭田重有朝臣も同じく拾わなかった。何か先例があるにしても、お骨を拾わないというのはいかがなものであろうか。

お経が終わってから、対御方・近衛局はお骨を拾った。長老のお経の後に、大光明寺の僧たちがお経を読んだ。そして小さなシンバルを打ち鳴らしながら、捧げ持ったお骨を寺の中にお運びした。お骨は住職のお部屋に安置した。次に僧たちがお部屋の庭先でお経をあげた。新御所様と私は地藏殿でそのお経を聞いていた。お経が終わって、皆がご位牌の前で焼香した。長老に挨拶をしてから、すぐに帰った。

仏事の事務取扱責任者

そもそもこの仏事の事務取扱を新御所様が田向経良卿に命じたところ、差し障りがあると言って断ってきた。公卿の位にあるものが

仏事の事務をすることは先例にないという。それで重有朝臣にお命じになったが、やはりきつぱりと断ってきた。長資朝臣は両親とも健在であるので、あえて収骨の事務をお命じにはならなかった。この他に適任者がいないので、仕方なく近衛局がすべて準備なさった。形だけのささやかな仏事だとはいえ、事務取扱者がいないのは先例に背くものであり、残念なことだった。やはり庭田重有朝臣その人が今回の事務取扱の最適任者であった。彼が辞退したのは納得できないことである。

二十七日、晴。勾当局が門前まで来た。しばらくの間、宮家の皆と対面してからお帰りになった。常磐井宮の娘である勸修寺御比丘尼がいらっしゃった。焼香してから、すぐに帰った。

服喪

さて喪服をいつ着るかということについて、先日、田向三位が陰陽師の賀茂在弘に諮問したところ、今月二十七日の午後五時がよろしいでしょうと占ってきた。そこで、新御所様と私は喪服を着た。すべてのことを簡略した形で行っているが、これは内々のことだからである。喪服は、上質な絹製の狩衣に大口の袴などである。西大路隆富が今日、家に帰っていった。

二十八日、晴。今日から法華經を写経することになった。私は第八巻を写す。仁科入道が庭先に来た。新御所様がお会いになった。十二月一日、晴。いつもの月初めのお祝いを形だけ執り行った。

二日、晴。十四日目の御仏事、大通院宮惠舜藏主が執り行いなさった。惠舜藏主はここ数日間、病気で伏見に来られなかったのである。即成院主と法安寺住職ら二、三人が来て、理趣經・舍利講式などを読

んでくれた。軽食をいつものように振る舞った。常徳院主が来て焼香をした。水無瀬具隆三位入道も来た。御牛飼の虎石丸が「出家したいので、お暇をください」と言ってきた。

後小松上皇の書状

さて今出川公行左大臣が書状を寄こした。後小松上皇様へ榮仁親王様のご逝去見舞に使者を送ったことをお話ししたら、上皇様はとても驚いたと丁寧なお返事があつたそうだ。特に琵琶の後継者について心配しているという上皇様のご書状も送ってくれた。新御所様はそれを拝見して、すぐにお返しになった。

今出川左大臣はまた、上皇様から喪を解いて復職するように命じられた。しかし、これを機会として、左大臣を辞職したいと申し上げたという。

三日、晴。朝早く惣得庵主が軽食を持ってきた。それを食べていたところ、正親町三条公雅中納言兼大宰権帥の姉である梅津陽湯院主善斎ら尼二、三人が来て、お経を読んできた。軽食が済んでいなかったもので、座敷にお招きしてお酒を勧めた。私ははじめて会った。近親者であるので、対面できてうれしかった。すぐにお帰りになった。梅津天真寺長老や慈斎院主らが来て、焼香していった。建仁寺の僧四、五人が来て、お経を読んでいった。高辻長広朝臣が来た。勾当局殿が金剛經と追加のお布施錢三貫文をお送り下さった。この金剛經は、御所様直筆のお手紙の裏に写経したものである。またこの金剛經の題名は、後小松上皇様が直筆でお書き下さったものだと

御仏事料の分担

五日、法安寺住職の良明房が軽食などを持ってきた。

さて大光明寺に特別に追善の御仏事をさせることは、経済的に苦しいので難しい。それで、形だけが食事料として錢五貫文とお茶菓子一盆を新御所様が光明寺へお送りになった。寺に籠もってお祈りをしてくれている僧へ感謝の気持ちを表すためである。

いずれにせよ御仏事料が足りないもので、ご恩地をもらっている者たちにも負担してもらうことになさった。対御方・近衛局・綾小路信俊卿・庭田重有朝臣・西大路隆富・冷泉永基・勝阿らに身分相応に御仏事料の負担を配分した。それぞれの負担額には差を付けた。田向経良卿は七日目の御仏事を準備してくれたので、今回の配分からはお除きになった。この他七日ごとの御仏事は、御所様の子供たちが負担することになった。

牛飼童虎石丸の出家

白川資忠神祇伯三位が雅量を通してお見舞いを申ししてきた。斯波義教勘解由小路右衛門督は、勝阿を通してお見舞いを申しした。虎石丸が出家した。その姿はみすばらしい。年老いて衰えた身体での出家はかわいそうなものだ。今夜、勝阿が酒宴を用意した。また光台寺の玄忠が来て、お酒を少し持ってきた。玄忠は時々やってくる僧である。

七日、朝に雨が降った。二十一日目の御仏事を繰り上げて今日、行った。洪蔭藏主が準備なさった。幹事役は退蔵庵主である。招待した僧は、大光明寺長老・蔵光庵主・退蔵庵主・行蔵庵主・指月庵主以下三十人あまりである。軽食をいつも通りとった。大光明寺前住職の多宝院主が来たので、彼にもすぐに軽食を振る舞った。いつもの

ように一時間ほどお経を読んだ。惣得庵主・同庵御寮理勝・明元らも呼び寄せて、新御所様の御前で法要後の軽食を宮家の男女と共にとった。

今日の御仏事は心が籠もっていたので、きっと御所様の尊霊も喜んでお受け取りになったであろう。芳徳庵主が酒などを献上してきた。八日、曇。寒さが厳しい。勧修寺門跡が浄土院をお見舞いの使者によこした。私には特別にお言付けがあった。今夜、伏見荘の村人たちがお酒を献上した。

九日、雪が時々舞った。前典薬頭の和氣明成朝臣が来た。和氣郷成朝臣も使者をよこした。楊柳寺の尼たちがお茶菓子などを持ってきた。焼香した。光台寺玄超がお茶菓子などを献上してきた。

貞成の断酒

十日、晴。夕方に雪が降った。故西御方の命日である。光台寺玄忠や妙俊らを法事に招いた。軽食はいつもの通り。私も身を浄めて、酒を断った。およそ七日の御仏事ごとでも、私は身を浄めて酒を断っている。勒王院主の洪西堂が法華経一部と布施の錢十貫文を送って下さった。思いがけないことで、とてもありがたいお志である。草玉庵主が茶菓子などを献上した。

十一日、雪が時々降った。光明天皇の皇女である法華寺長老が急いで写したお経一部と奈良紙二十束を送って下さった。御所様三十五日のご追善供養のためだという。それで御所様形見の品としてツヅラフジで編んだ箱一つと瑜伽経一卷を新御所様が法華寺長老へ差し上げた。宇治の智恩院主が来た。惣得庵主・御寮・明元らもお酒を少し持参してきた。今夜は宮家に宿泊して、光明真言を唱えるという。

寿藏主が仏事をした。大光明寺に行き風呂を焚いた。その風呂に、新御所様と私と侍臣たちが入った。

室町殿の御旗

さて聞くとところによると、鎌倉公方の足利持氏左兵衛督が、室町殿足利義持殿に御旗を下さるように申請したという。その御旗の文字を世尊寺行豊が書いた。世尊寺家が御旗の文字を書くのは、代々続くめでたい先例だそう。身を浄めて文字を書いたという。事務取扱の長沢がこの御旗をもって関東へ行くそう。

十二日、雪が降った。二十八日目の御仏事を綾小路三位（田向経良）が準備した。仏事に招いたのは光台寺住職ら八人である。惣得庵主・御寮・明元らも招いた。軽食をいつもどおり、宮家の男女とともに食べた。一時間ほどお経を読んだ。阿弥陀経の功德を讃える行事などもお勤めした。

十三日、晴。崇光天皇の御年忌法要、日程を繰り上げて行った。御仏事として一時間ほど、いつものようにお経を読んだ。

栄仁親王の分骨

さて四十九日の間、御所に安置してあった大通院・栄仁親王様のご遺骨を、今日、深草の法花堂や椎野寺主の浄金剛院などへ分骨なさった。禅僧の衣を着た勝阿が持つていって、深草の寺僧が受け取ってお寺に収めたそう。真修院は軽食代の錢一貫文を、御比丘尼御所は軽食や酒樽を、それぞれ送って下さった。

さて絶海中津国師の墓所前で称光天皇陛下が仏法を受けた印として僧衣を着られる儀式があった。鹿苑院主鄂隠和尚が朝廷に行つて取次をした。舞人も同行して、厳めしい儀式だったらしい。

私が喪服を着ける時、薄墨色の烏帽子が出来上がってこなかった。今日、冷泉正永が持つてきたので、身につけた。出来上がるのがとても遅くて、けしからぬことだ。

十四日、晴。聞くとところによると、絶海和尚に国師号が送られた。浄印翊聖国師というそう。勅使は日野有光中納言だ。勅使へのご褒美は錢百貫文と砂金などで、相国寺から日野へ贈られたという。称光天皇陛下が仏法を受けて、ご法名を大宝寿となさったという。

称光天皇の諱

さて陛下のご諱（※）は躬仁である。ところが躬の字について室町殿が批判なさっている。身に弓があるのがよろしくないということらしい。それで室町殿が鹿苑院主鄂隠和尚とご相談になって、躬と同じ音の別字に改め直すべきだということになった。室町殿は鹿苑院主に、このことを陛下に申し上げなさいとお命じになったそう。しかし僧中から陛下へそのように申し出るのはいかがなものかということ、鄂隠和尚は辞退なさった。しかし重ねて室町殿からご命令があったので、鄂隠和尚から陛下へお話しして、結局、実（三）仁とお直しになったそう。僧中から天皇家へこのようにお勧めするという先例があるのかどうか、疑わしい。希代のことではないだろう。また白河上皇の皇子実（サネ）仁親王と同じ字であるのも、いかがなものか。

今日、浄隠庵主が茶菓子二盆を献上してきた。伏見荘の殿原衆（※）たちも酒樽二つと錢一貫文を進上してきた。御所様没後の四十九日の間に諸人からいただいた芳志を漠然と記してきた。こういうことを記すのは心いやしい事であり、後の人がこの記事をみることはよ

ろしくない。憚られることである。

※諱（いみな）：最も大事な名前。実名（じつみょう）、忌み名。

※殿原衆（とのばらしゅう）：村落で「○○殿」と呼ばれる有力者。

十五日、晴。香雲庵主が軽食などの準備をなさつてくれた。十六日、晴。陰陽師の土御門泰継朝臣が来た。大光明寺の三十五日目の御仏事を周乾蔵主が主となつて執り行うこととなった。伏見荘内の寺庵の僧たち八十人を御仏事に招くという。

安楽光院長老が来た。明日、三十五日目の法要を繰り上げて、椎野寺主が伏見宮家で仏事を執り行う。安楽光院長老は、その御経供養の導師として招かれてきたのである。故隆仲卿の子息である見乗房も長老と一緒に来た。

貞成の旧友・良政入道の死

今出川家から書状が届いた。同家の下級の侍であつた良政入道が昨日午前十一時に亡くなったそうだ。良政入道は、法名を良円という。西園寺家の侍であり、また今出川家にも奉公していた者であつた。今出川家にいた頃、長年、私も馴染みにしていた旧友である。亡くなったのは、かわいそうで、とても残念だ。

足利義嗣の謀叛露顕

ところで聞いたところでは、足利義嗣押小路大納言が叛逆を企てていたことが明確になったという。関東での謀叛は、この大納言が手を回したせいらしい。延暦寺と興福寺を誘い入れようとした義嗣の回覧状などを園城寺が室町殿にお目につけた。

それで臨光院内に牢屋を作つて、義嗣を監禁した。ところが盗人が忍び込んで、牢屋の格子を切り破つた。番人衆がそれを見付けた

ので、盗人は逃げてしまった。これは義嗣を逃がそうとしたためらしい。それでいよいよ厳しく警戒するようになった。今後、このようなことがあつたら、義嗣を殺害してもよろしいと室町殿はお命じになったそうだ。

十七日、晴。三十五日目の御仏事を伏見宮家で椎野寺主が用意なさつた。急いで写した法華經一部を供養された。導師は安楽光院長老である。一時間ほどお経をあげた。お経供養の際の説法が特にすばらしくて、感動の涙がこぼれた。皆も涙を流して、哀愁が深まつた。

供養に添えたのは、絵像の地藏菩薩一幅、これは新御所様の直筆である。そして、父の手紙の裏に印刷した梵網經一卷、私が書写した円覚經一卷、父の手紙の裏に印刷した法華經寿量品一卷などである。対御方・近衛局・綾小路三位（田向経良）・庭田重有朝臣らが、それぞれの品の名を読み上げて、奉納した。僧への布施はそれぞれ個別に、後日お送りすることになった。惣得庵主・御寮・明元ら、それに善勝庵主を仏事にお招きしていた。今日の法会は形式に則つた厳かなものであつた。

十八日、晴。良西堂主が焼香に来了。即成院主がお酒を持ってきた。

栄仁親王の形見分け

十九日、曇。父・大通院のお持ち物などを取り出して、形見の品として皆にお分けになった。たいした物はないが、先例にならつての事である。宮家以外の人々へもお送りになった。形見の品のリストを別紙に記しておいた。

入江殿から時間をかけて書写した法華經一部・軽食・茶菓子・酒樽などが送られ、入江殿今御所からも茶十袋とお茶菓子二盆が送ら

れてきた。勧修寺御比丘尼からはお茶菓子一盆と酒樽などが送られてきた。伏見荘政所の小川禪啓は、錢一貫文と酒樽などを献上してきた。これらの品々は、早速、皆で味わった。

栄仁親王月命日の法要を始める

二十日、晴。今日から、父の月命日の法要を始めた。作法通りの御仏事で、一時間、いつも通りにお経をあげた。法会の軽食は寿藏主が準備した。光台寺がお茶菓子二盆と酒樽などを送ってきた。

さて蔵光庵で特別に忌中の仏事をしてくれていた。その仏事が今日で終了するという。新御所様は蔵光庵へ焼香をしにお出かけになった。

今夜、朝廷の内侍所神楽があった。そのために綾小路信俊は今日の法会を欠席した。

二十一日、晴。四十二日目の御仏事を繰り上げて行なった。私が御仏事の準備をした。法要に招いた蔵光庵の僧たちが来た。一時間ほど通例通りお経をあげた。軽食を寿藏主が何とか形ばかり準備してくれた。伏見宮家の困窮を今更ながら歎いたが、それにしても残念なことである。岡殿が法華經一部と布施の錢二貫文を送って下さった。

岡殿が父のためにお読み下さったお経の一覧も一緒に送られてきた。ご丁寧なことで痛み入る。

大光明寺の四十九日御仏事も明日が最終日である。しかし今日が命日の翌日なので、夕方にご位牌を仏殿の惣塔へお渡しするそうだ。その折の読経に参列するために、新御所様・私・椎野・対御方・近衛局らが大光明寺にお参りした。侍臣たちも一緒に参りした。梅尾の阿伽井坊からお見舞いの使者が勝阿のところへ来たそうだ。

菓子を檜の小箱一箱分と酒樽などを勝阿が献上してきた。阿伽井坊のお見舞い分として、勝阿が自分で用意しておいた品だそうだ。

二十二日、晴。大光明寺での四十九日御仏事の最終日である。伏見荘の寺庵の僧たちも皆、大光明寺に招かれているそうだ。建仁寺前住職の文西堂が来た。医師の心知客が香典の錢一貫文を持参してきた。大教院隆経律師も来た。彼は、仁和寺御室永助親王の御使いも兼ねて、お参りに来たそうだ。私は二十日から三日間、身を浄めて酒を断っている。

二十三日、雨が降った。御仏事として風呂をお焚きになって、皆が入った。今出川家より時間をかけて写した法華經一部とお布施の錢三貫文が送られてきた。「四十九日の追善仏事に対して特に志を表した次第です」と今出川公行左大臣が伝えてきた。夜に芝殿が一献持参してきて、そのまま泊まっていくという。彼女は明日の御仏事の軽食に参列したいということだった。

観音懺法

二十四日、雨が降った。朝早く、道場を整えた。塗籠一間を押し広げて、そこに屏風を立て回した。本尊の釈迦如来像を屏風に掛けた。西の脇侍に阿弥陀如来像を掛けた。本尊の前に大机を一脚置き、唐織物の敷物で覆った。机の下に黒白の水引を垂らした。机の上に父のご位牌を安置し、お供え物・花瓶・香炉・燭台などを通常通りに置いた。代々の本尊である厨子に入ったままの千手観音菩薩像を仏壇に置いた。これは観音懺法を行う時の本尊である。道場の北奥、本尊の脇四間に屏風を立て回して、東側に不動明王像を掛けた。南面の四間に緑色の御簾を掛けた。西側の廂間二間にも緑色の御簾を

掛けて、いずれも参列者席とした。今夕は観音懺法、明日は焼香をこの道場で行う。以上のように道場を整えた。

入江殿今御所が焼香のためにいらっしゃったようだが、すぐお帰りになった。玉櫛禅門も来て焼香してから、すぐに出ていった。西大路隆富が来て、御仏事料の銭二貫文を献上した。相応院門跡が御馬一頭の代わりとして銭二貫文をお送り下さった。お経をあげるためのお布施だという。夕方に大光明寺長老や根西堂ら僧衆十七人が来て、お経をあげた。この時分には、雨風が激しくなり、ひどい天気となった。お経を読み終えて長老たちは出ていったが、懺法をする僧たちは残った。

午後九時に懺法が始まった。導師は勒王院主の洪西堂、香花の役は天龍寺琢首座で、僧衆は根西堂・継首座・指月庵主廓首座・乾藏主・蔭藏主・蔵光庵主訓藏主・華藏主・禅藏主・周書記・長老の衣鉢侍者・維那・警侍者ら十四人である。懺法は殊にすばらしく、感涙を催した。父の幽霊もきつと喜んでゐるに違いない。参列者は大勢であった。芝殿・惣得庵主・御寮・明元・比丘尼らが参列した。懺法が終わって、僧たちに食事を勧めた。その後、退出していった。明日の準備で、真夜中まで忙しかった。

四十九日仏事の最終日

二十五日、晴。風も静かだ。四十九日御仏事の最終日だ。大光明寺長老が焼香した。勒王院主洪西堂や根西堂ら僧たち三十六人を招いて、朝早く軽食を振る舞った。僧たちはすぐに退出して一時間後にまた来た。大光明寺の僧全員がやって来た。ただし道場の座席が狭かったため、読経が終わった段階で数人が退出した。お寺へ早退した僧

のために軽食を差し入れなさった。

まず焼香し、次に読経があった。更に軽食があつてお茶を出した。その後、新御所様が大光明寺長老と勒王院主とお会いになった。そして僧たちは帰っていった。

四十九日の御仏事が無事終わって、喜ばしい。特に焼香の儀はすばらしかった。父の尊霊が成仏したことは間違いないであろう。今日の御仏事は、寿藏主が幹事をしてくれた。伏見宮家の男女や外様の者たちも軽食をとった。とても盛大な儀式だった。無事にやり通せたのは、寿藏主のお手柄である。惣得庵主らもいつも通り参列してくれた。

さて綾小路信俊前参議はやってきたものの、四十九日の御仏事には参加しなかった。ただ来ただけで、急な用事があると言つて、すぐに出ていった。焼香にも参列しなかった。よろしくないことだ。きつと何か考えるところがあるのだろうが、如何なものか。六条院庁の定直が麻の狩衣を着て、焼香の間だけ参列した。焼香が終わってから、出ていった。椎野・乾藏主・蔭藏主らお籠もりしていた僧たちが出ていった。冷泉正永や勝阿も同じく出ていった。

直会の魚食

道場を片づけた。西大路隆富が「御仏事が無事終わって、よろしゅうございました」とお祝いのお酒を献上して出ていった。夜になって、田向三位が酒宴を設けた。四十九日法要最終日の夜にお魚を食べるのが、習わしだという。魚を食べるのにはまだ抵抗があつたが、直会として食べた。さて退蔵庵・惣得庵から軽食の費用少々を入れて下さった。今日は吉日なので、年末の煤払いを始めた。ただ

し掃除まではしなかった。

【頭書】さて焼香の喪主である新主のお名前をどのように記したらよいでしょうかと長老からお尋ねがあった。先例がよく分からなかったので、東坊城長遠参議に尋ねたところ、無官の宮が新主である先例は存じませんという返事だった。それでただ「伏見宮」と書いてくださいと新御所様は長老に返事をなさった。

領地継承承認の政治工作

二十六日、晴。田向三位が京都へ出かけた。新御所様の使者として鹿苑院へ行つたのだ。父が残した領地を新御所様が継承するにあたって、室町殿へお口添えくださるようお願いしたのである。父の形見二種を鹿苑院へ贈ることになった。一つは不動尊の絵像である。これは、縫い物で、代々秘蔵してきた本尊である。特に縫い物の絵像は他に例のない珍しいものである。もう一つは、瑠璃で作られた花瓶で香台に据え置かれてある。この絵像・花瓶・香台の三品を田向三位に持たせた。

さて故御所様が書かれたご遺書を陽明局が新御所様へお目にかけた。「ご遺書に書かれた追善供養の件に関する大光明寺の意向については、後で私からお聞きしてみしよう」と新御所様は仰ったそう。

勾当局が新御所様の姫君たちにご服を献上なさった。私の娘にも下さった。思いがけないことで、うれしい。

治仁王姫君の魚味始・深除

二十七日、晴。夕方に雪が降った。煤払いのお祝いをいつもの通り行った。田向三位が京都から戻ってきた。鹿苑院主と会って、詳しく

申し上げたそう。だ。「万事、いい加減にはいたしません」とのことだった。縫物の不動像を特に喜びになられたそう。大変な宝物なので、大事にしますとのことだった。

今夜、新御所様の次女である姫御所の御魚味始(※)と御深除(※)などのお祝いの儀式があった。形だけの儀式である。田向長資朝臣の嫡子も魚味始のお祝いがあった。田向三位がその孫を抱きかかえて、やって来た。祝い酒を献上してきた。特に三献の酒宴を行い、新御所様が引き出物をお与えになった。引き出物は、青銅製の花瓶と扇である。その後、すぐに退出した。蔭蔵主が今日、天龍寺にお歸りになった。

朝廷では今夜、貢馬天覧の儀式があるそう。

※魚味始(まなはじめ)：幼児にはじめて魚肉を食べさせる儀式。

※深除(ふかそぎ)：幼児の髪を切りそろえる儀式。

二十八日、雪が降った。惣得庵主・御寮・明元らが酒樽を持参してきた。二十九日、曇。十二月の精進として身を浄めるために、通例通り、お風呂に入った。新御所様は大光明寺へお出かけになった。父・大通院の形見の品三種類をお寺に寄付なさった。その形見の品は、文殊菩薩の姿が写し出された草衣一着、南宋の僧・北澗の詩集十冊、それに茶碗・花瓶一つであった。

貞成、娘と初めて対面する

今夜、私の妻である今参局が産所から戻った。新生児の姫宮を連れてきたので、すぐに会った。新御所様へ姫宮を見せに行ったら、扇と高麗茶碗の呉器を下さった。特にお祝いの酒宴をした。三十日、晴。これで暦も巻き尽くした。忙しい一年だった。勧修寺経

直が来た。勧修寺経興は忙しいということで、来なかった。経直は経興の代理で来たという。経直は年末年始の神事があるので門内には入らなかった。初めて宮家に来たので、新御所様が門前までお出ましになって、対面された。

大光明寺長老が来た。栄書記が描いた梅の花の唐絵一枚、オウム貝などで作った盃、杉原紙十帖を持ってきた。新御所様の代替りのお祝いとして進上したのだという。寺庵の僧たちもそれぞれ歳末の挨拶に来た。除夜のお祝いとして、酒宴があった。来年は、今年に引き替えていいことがありますようにと念願して、皆でお祝いした。

伏見宮家の雑事や御仏事を詳しく記してきた。後世の人が見るのは差し障りがある。しかし、後になって自然と分らないこともでてくるだろうから、詳しく記録したのである。私の死後は燃やすべきである。月次の連歌懷紙がなくなってしまうのはよろしくないで、わざと連歌懷紙の裏にこの日記を書いた。後日に一覧するためである。百韻の順番通りに懷紙を貼りつないだ。今後も、順番を誤るようなことがあってはならない。

（続）

『看聞日記』現代語訳（二）（『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号、二〇一四年）正誤表

四月二〇日条

（誤）坊城長広刑部大輔

（正）高辻長広刑部大輔

五月五日条

（誤）一条経嗣関白の家や九条満教右大臣の家

（正）朝廷の実権を握る九条満教右大臣の家

五月一七日条

（誤）※陽明局：用健の母（三条実音の娘）。

（正）〈削除〉

六月四日条

（誤）清原範量藏人

（正）岡崎範量藏人

六月八日条

（誤）近衛局（栄仁親王の妾・日野西貞国の娘）

（正）近衛局（栄仁親王の妾）

六月一〇日条

（誤）葉室教仲

（正）五辻教仲

六月一〇日条

（誤）故葉室朝仲入道

（正）故五辻朝仲入道

六月一一日条

（誤）右楽の鳥蘇

（正）右楽の古鳥蘇

六月一三日条

(誤) 大覚寺義昭殿

(正) 大覚寺殿

六月一三日条

(誤) 日野有光大納言入道・

(正) 日野西資国大納言入道・日野有光卿・

七月一九日条

(誤) 高倉通光三位入道

(正) 慈光寺通光三位入道

以上